

プレFD段階におけるパターン・ランゲージの活用と知識生産(1) ——Gibbons,M.のモード論を補助線として

伴野崇生¹⁾、今井桂子¹⁾、山本絢子²⁾、柘植雅則¹⁾、山口圭治¹⁾

社会構想大学院大学 実務教育研究科¹⁾

社会構想大学院大学 先端教育研究所²⁾

1. はじめに

本発表では、Gibbons,M.(1994/1997)のモード論を補助線として、プレFD段階におけるパターン・ランゲージの活用と知識生産について検討する。

パターン・ランゲージは、1970年代に建築家クリストファー・アレグザンダーが住民参加のまちづくりのために提唱した知識記述の方法である。「パターン」は、いわば文法のようなものをもっており、決まったルールで記述される。一定の記述形式で秘訣を記することによって、パターン名(名前)に多くの意味が含まれ、それが共通で認識され、「言葉」として機能するようになる。パターン・ランゲージを学びに取り入れると、学び手それぞれが自分の状況や個性などに合わせてヒントを取り入れ、自分らしく実践したり、成長したりしていくことができる(クリエイティブ・シフト Web サイト)。

モード論におけるモードIIにおいて現実の社会に起きた課題の解決に向けて、社会に開放された社会関心駆動型の知識生産が行われる(サトウ2012)。本発表ではパターン・ランゲージによって描かれる知識も、それに触発されて生産される知識もモードII的であること、さらにはモードII的であることによって、(実務家)教員として自分らしく活躍するためのあり方を模索することが可能であることを理論的に考察する。

2. Gibbons,M.(1994/1997)のモード論

モード論ではモードI、モードIIという二つのモードを措定する(ギボンズ編著1994/1997)。ここで言うモードとは知識生産の様式である。モードには基礎・応用という含意はない(サトウ2012)。

モードIの研究が学範(discipline:サトウ2012)のコンテキストのなかで生み出されることと対照的に、モードIIの知識はより広いコンテキスト、学融的(transdisciplinary:トランスディシプリナリー:サトウ2012)な社会的、経済的コンテキストのなかで生み出される。モードIIの特色は、現実の社会に起きた課題の解決に向けて、様々な学範的知識が学融(transdiscipline:サトウ2012)的に利活用されることにある。

モードIIにおいては、それが知識生産の特定の形態だというためには、認知的実践、社会的実践としてなにが適切かという合意があり、その合意によって研究が先導されている必要がある。行動のフレームワークのなかに異なる技能を統合することで、潜在的な解が決まる。モードIIにおいては、最終的な解の姿は、それに寄与するどの個別の学範の解をも超越したものになる。モードIIは、社会的に解決が必要な問題について、社会の側、現場の側から要請があること、その要請に対して1つあるいは複数の学範がコラボレーションを行うことに力点がおかれる(ギボンズ編著1994/1997、サトウ2012)。

モードIIは、学問領域のみならず実務家や市民の参加も視野に入れている。また、さまざまな形態の「知」が集まり、個々の学範に依拠しない、独自の理論構造、研究方法、研究スタイルを生み出す(サトウ2012)。

3. 「実務家教員のためのパターン・ランゲージ」の作成過程

実務家教員となり、実務家教員として活躍していくための暗黙知や経験則は、社会的に十分に可

視化・形式知化されているとは言えない。そこで、すでに活躍している実務家教員17名(企業研修講師4名を含む広義の実務家教員)を対象にインタビュー調査を行い、実務家教員として活躍するための知を「実務家教員のためのパターン・ランゲージ」(実パタ)として言語化・体系化を試みた。インタビュー対象者の実務領域は、国家公務員、メーカー、地域イノベーション、マスメディア、理学療法、機械工学、看護、医学、キャリアコンサルタント、カウンセリング、土木、建築、広告、企業内キャリア支援、ライフプランニング、品質管理であった。看護については領域や専任/非常勤といった背景の異なる2名を対象とした。

パターン・ランゲージの作成は大きく4つのフェーズを経て行われる。①マイニング、②抽出、③体系化、④ライティング・シンボライジングである。①は、マイニング・インタビューおよびパターン・ランゲージの種の記述を行う。②では、記述された種についてKJ法(川喜田1986)を用いて似ているものを集めて分類し、パターンの元をつくる。③では、抽象化・統合・切り捨てなどにより構造を捉え、全体像と各パターンの位置づけを捉えて①②を経て得られたまとまりについて体系をつくっていく。④では、文章をパターン形式で作成するとともに、正しく伝わる文章として実践知を言語化し、各パターンの本質を表すイラストと、パターン名の紹介文を作成する。

4. モードIIの知識生産としての／を触発するパターン・ランゲージ：実パタを例として

実パタは、単に実務家教員の暗黙知や経験則を可視化・形式知化・言語化しただけに留まらない。「個々の学範に依拠しない」「さまざまな形態の『知』」が集まり、新たな体系としてまとめられたものである。また、「最終的な解の姿」としての実パタは、インタビュー対象者の背景である「どの個別の学範の解をも超越したもの」となっている。さらに、(実務家)教員の活躍という「社会的に解決が必要な問題について、社会の側、現場の側から要請」に対するコラボレーションによって

作成された点もモードII的である。

実パタを使ったワークを実施してきた経験からは、実パタによりプレFD段階にある本学大学院生らが自己内対話を深め、実パタを契機とした省察を行うことができることが観察されている。また、実パタを媒介とした他者との対話を通じてモードII的な知識生産を行うことも観察される。

詳細はポスター発表時に補うが、パターン・ランゲージは「中空のこぼれ」と呼ばれる具体的すぎず、抽象的すぎない抽象度で描かれる。これにより、「学び手それぞれが自分の状況や個性などに合わせてヒントを取り入れ、自分らしく実践したり、成長したりしていくことができる」ことも重要である。

以上のことから、実パタも実パタに触発されて生産される知識もモードII的であり、モードII的であるからこそ、(実務家)教員として自分らしく活躍するためのあり方を模索することが可能であると考えられるのである。

参考文献：

川喜田二郎(1986)『KJ法——渾沌をして語らしめる』中央公論社

ギボンズ,M.編著、小林信一監訳(1994/1997)『現代社会と知の創造——モード論とは何か』丸善ライブラリー

クリエイティブ・シフト Web サイト「パターン・ランゲージとは」<<https://creativeshift.co.jp/pattern-lang/>>2023年11月2日最終閲覧

小林信一(1996)「モード論と科学技術の脱-制度化」『現代思想』24(6),pp.254-264

小林信一(1999)「科学技術のモード論の背景と展開」『まてりあ』38(11),日本金属学会,pp.830-833

サトウタツヤ(2012)『学融とモード論の心理学——人文社会科学における学問融合をめざして』新曜社

伴野崇生・正井美穂・阿部有里(2023)「実務家教員のためのパターン・ランゲージ——新しい道を切り拓いていくための24のことば」『社会構想研究』5(1),pp.29-88